
僕の彼女は男の娘！？

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の彼女は男の娘！？

【Nコード】

N8757X

【作者名】

ケン

【あらすじ】

この話は、男の娘な彼女と地味？な青年が彼女を男から女へと性転換させるために、突如見つけた異世界へと入りこみその方法を探しながら冒険をする物語です。

軽く思いつきで書いています

はじめて書く小説なので、おかしな文法や誤字脱字などが多数出てくる場合がございますので、ご指摘していただけるとありがたいです。

第一話 出会い（前書き）

はじめまして、初めて小説を書きます。

ほぼ思いつきで書いているので、更新頻度はめっちゃ遅いです。

なるべく早く更新は致しますが、学生なので大会やレポートが忙しく更新頻度はが劣るかもしれません

誤字脱字などがあればバンバン指摘ください

第一話 出会い

僕は地味な大学2年生

名前は高原優時「たかはらゆうじ」

ある日の昼休みに僕は告白された・・・

「同じ講義を受けているあなたに一目惚れしました
私と付き合って貰えませんか？」カァー

その人は、キャンパスでも美人で有名な同学年の子で神立楓「かんだかえで」と言う

背がスラッと高く顔はカワイイと言うよりも、誰が見ても美人と
思っただ顔立ち
髪は黒髪ロングで、清楚なお嬢様って感じかな（笑）

そんな彼女がいきなり僕に

（一目惚れしました??）

僕は軽く混乱した

なぜなら彼女は、キャンパスないで誰もが狙うキャンパス一のマ
ドンナだったからだ

「なぜこんな地味な僕の事を？」

彼女はなぜかハアーツとため息をつくところ言った

「あなたって案外ニブイのね」

「へえっ？」

僕は何が何だか解らず間の抜けた声で聞き返した

「だから、あんたは案外ね女の子からモテてるってこと」(怒)

「..?」

「ええっそっよ」

「知らなかったー マジデエこの僕があ？」

「ハアッ何テンション上げてんのよ」

だって入学してからイメチェンしたからって言うても、特に何もな
かったしな

「だってこの僕が・・・」

もしかしてモテ期到??

あれなんか頭がクラクラするよっな

「だから返事はなによ教えなさいよ（怒）（怒）（怒）」

ガンガン

「ちょっと 力強すぎイタツイタいつ??」

ガシガシゲシ

そこには僕の肩を思いつきりゆらす神立の姿が

「答えるからストツープっ??」
「一旦落ち着いてからにしよう」

「はぐらかすな（怒） コツチは死ぬほど緊張したんだ（怒）」

あれっなんか口調変わってない？

てかコエー

「わっわかりました？わかりましたから??」 すうーハアー

「僕もこのキャンパスで初めて見た時から一目惚れでした」

「だからこんな僕でよければ付きまっ……」

「ほんとうに?」

「ええっ だから僕も一目惚れだったわけですし」

そこには、誰もが見入ってしまうほどの笑顔が咲いていた

「じゃあ今日から恋人同士だからゆうくんって呼ぶね？」

「えっ恥ずかしすぎるだろそれは」カァー

「いいじゃんそれくらい」

いくらなんでも恥ずかしすぎだよ
だって恋人になってまだ少ししか経ってないのにいきなりその呼び
方は

「じゃあこれから私のことは、かえでって呼んでね？」

「ねくくひひひひひひひひひひ」

「か、かえで、よ、よろしくな」

恥ずかしー――

「ほら早く呼んでね」

「.....」

こうしてチヨ一美人な彼女が出来て浮かれまくっていました

あることを、カミングアウトされるその時までには・・・

第二話 ぎこちない初デート前編

今日は、楓との初のデートだ？

「やっぱり緊張するなあ、服も髪もこんなんでもよかったかな？」

朝には、初デートだのなんだかんだ浮かれて居たはずの俺はどこに消えたのやら

待合の時間が近くなってきたら急に緊張してきてしまったのだ

「もうすぐ、待ち合わせの時間か・・・緊張する」

待っている間にいろいろなことを考えていた

（彼女は普段から可愛いくて、美人でモデルみたいな完璧だから
どんな服を着てくるのだろうか？

彼女は足が長いからパンツ姿だろうか？それともスカートで来るの
だろうか？

素顔がきれいだからいつも通りスッピンだろうか？

今思ってみたら彼女が化粧をしているところを一度も見たことがない

それより早く着きすぎたな)

などなど考えているとあっという間に待ち合わせ時間を
30分も超えていた

すると遠くのほうから、手を振りながら小走りで来る女性が

「めいめい………ん」 タッタッタ

「えっ！？か、かえでえ？」

「ハアハア　えっ何　ハアー　そうだけど」疲

「いやぁー化粧をした姿を初めて見たもんで

いつも綺麗でかわいいが、いつも以上に大人っぽく見えて

一瞬、誰かわからなかったんだよ？」

「ほんとに？　がんばって化粧をしてみてもよかったあ〜」　パー

彼女の顔が輝いた

でもこれはお世辞でも何でもないんだ

ぼくは、本気で彼女のことをわからなかったし

あらためて僕には不釣り合いなんじゃないかと思ったりもした

だけど彼女の輝いた顔を見たら、そんなことどうでもよくなった。

「それじゅあ、行きますか」

「そついえは今日は、何処に連れて行ってくれるの?」「ニッコ

「あぁまだ言っていなかったね、今日はここに行こうと思うんだ」「ガ
シャペラペラ

「Weightlessness Park」で「……」

「新しくできた遊園地だよ」

「なんて意味なの?？」

「無重力パークだよ」「ニヤッ

「どーゆう 意味ですか？」

「単純に、日本で一番ふわりとくるジェットコースターや
乗り物が多い遊園地だよ」

「何それ、面白そう 私、絶叫系大好きなの」ワクワク

「よかった」ホッ

内心彼女が絶叫がだめだったらどうしようよ

心臓がバクバクだったのだ

だから僕は、彼女が絶叫好きでよかった

一緒に乗れるし一人より二人のほうがいいにきまってる？

第三話 ぎこちない初デート 後編(前書き)

さて少し間があいてしまいましたね

あすは、弓道の大会です

マジでだるいです

第三話 ぎこちない初デート 後編

「まずは、軽い奴から乗ろうか」

「ええ〜なんでえ〜？ アレから乗ろうよ」

「ダメだ？ だつて考えてみるよ」

あんな奴から乗ったら、他のが怖くなくなるじゃないか??？」

「ああ ソウデシタ」アハハ

「こんなのへっちらだな」ニヤッ

「ん？」「ん？」

「何が怖くないよ？」

結構来るじゃないコレ(怒)

「そーだったな」アハハハ

意外と怖かったな　でもこうなったらどれが一番か

全部乗って確かめてやる

「これがこんなに怖いなら、どれが一番か確かめてやるわ」

彼女も同じ考えだったんだ・・・

「ホラ行くわよ つぎはアレ？」

「あのお~~~~~そろそろ休憩にしません？」

「そうね、おなかも減ったことだし休みましょう」

そして食いすぎた 午後も絶叫三昧

回転系で僕は、ついに気持ち悪くなり やらかしたけど

特に何もなかった

そして、最後に乗るのは観覧車でしょっと同意見だったため

ただいま観覧車に乗車中

「今日は、ありがとう とっても楽しかったよ

またデートで連れてきてね？」

「そんなのお安い御用さ、それよりさ・・・

観覧車といえばあれじゃない

そのアレだよ」「テレテレ

「……………」
「チュ

「えっ」

「本当は、あなたからして欲しかったんだけどな〜〜」

私のファーストキスよ ありがたく受け取りなさい」「カァ〜

「もちろんだ」

それから恥ずかしすぎてまともに話すことが出来なかった
はじめてであったころに戻ったみたいな感じだった

「わたしのうちはここだから また明日」

「ああ またな」

やべーニヤニヤがとまんねえー

彼女の初キスゲット 俺も初だけど

でも明日からも普通に学校まともに話せるかな

まあいいか

第三話 ぎこちない初デート 後編（後書き）

人物紹介

たかはらゆうじ
高原優時

性別 男

身長 178cm

顔 さわやか系

性格 結構静かな感じ だが絶叫マシーンや激しいものが好きだ
つたりもする

かんだかえで
神立楓

性別 男の娘（現段階では）

身長 170cm

顔 かなり整った顔立ち めっちゃ美人 黒髪ロングヘア

性格 元気でボーイッシュ 主人公一筋で純粹 たまにテンションが異常な時もあるかも

第四話 順風満帆からの衝撃告白（前書き）

来週からめでたくテスト習慣に入るため完全更新停止となります

第四話 順風満帆からの衝撃告白

彼女との初デートから半年ほどが過ぎようとしていた

初デートでおどおどしていた俺はいなくなり

次第に彼女をリードしていくようになりだした

「よお？ おはよう」

「あっ ゆうくんおはよおー？」

相変わらず仲は、いいままで

このまま結婚かな 妄想

「今日はどう行く？」

「ねえ優時」

「ドキッ……な、何？」バクバク

楓が俺のことをゆうクンではなく優時と呼んだ

初めてフルで呼ばれた気がする

なんだろう 不安だ

「実はこのデートの後に大事な話があるんだ……」

「うん……」バクバクバクバク

えい~~~~~大事な話って何

ま、まさか……別れ話？

い、イヤ、いやだあ~~~~~

違うよな……うんちがう……絶対に違うもんね

「じゃあいっつか」

「う、うん（大事な話マジで気になる）」

「うわーアレ見てすげくない？」

「うっ」

「ねえーペンギンだって・・・うわぁ〜赤ちゃんだチョーかわいい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「イルカショーがもうすぐ始まるって見に行かない？」

「聞こつてるの(怒)」
「ミッヅ」

「.....」

「ねえ」

「.....」

「あたっ なっ、何？」

「あなた何も聞いていなかったのね・・・だから

イルカショーが始まるから見に行かない？って聞いたの？」

「あっ そう言えばそんなのもあったねえー」

「で・・・行くの？行かないの？どっち

「じゃーいくか

なんだろうつきになるなあ

「ねえーゆうクンどーしたの？　なんか上の空って感じ」

「いや何でもない」

「もしかして朝のいじや？」

「.....」

「.....」

「.....ごほうじき」

「.....」

「落ち着いて聞いてね・・・実は、私はいや僕は男なんです？」

「はっ？ えっ！？ お、男」ポカーン

「今まで黙っていてごめんなさいでも僕・・・いや私は

一人の女性としてあなたが好きだったから

嫌いななられて別れるのがいやだったから

グスツ・・・ヒック・・・うう・・・黙ってて

エグツ・・・ごめんなさい・・・うう」

「……………」ダキッ

「えっ？」

「俺がそんなことでわかれると思ったか？」

「俺たちの愛がそんなにも軽いものか？」

「……………」

「それは違うね・・・俺はこの半年間本当に楽しかったし

これからもこうやってやっていきたいし

な、なんて言うか・・・好きだ？

どんなことがあってもこの気持ちは変わらない

だからあらためて僕の彼女になってください」「ニコッ

「あ、ありがとうございます・・・うん

・・・」

そして僕たちの一難が去った

第五話 でもおまえってホントに男なの？

前回楓が男だと言いだした

自分は、楓が大好きだ・・だから男だろうが女だろうが関係ない
でも本当に男なの？

体つきはどう見ても女だそれに声もソプラノ調だし
体はともかく声なんかどうしようもできないだろ

「ねえねえ楓」

「なに？？ゆづくん」

「この前さ・・・かえでは自分が男だって言ったじゃん」

「うん言ったけど・・・なにやっぱり男だから嫌になったとか」ウル
ウル

「そんなわけねえだろ？ ・ ・ ・俺は男だろうと女だろうと楓が大好きだ」

「
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
」
カー——

「ととにかくそうだから100%お前が男だから別れるとかない
から？」

「うんうん……でなんだっけ？」

「いやどっからどう見ても女にしか見えないけど・・・

本当に男なのかなって、いやっついでに俺の家で見せてもらえないかなって」

「えっ!?!?」

「あつだ、ダメだよなやつぱり・・・ゴメン忘れて」

「べ別にいいけど・・・実はこの先の展開を望んでる系？」

「ま、まあそう言われるとそつでもあるな」

「変態（笑）」

「グツ・・・今の一言は結構効いたぞ」

「だって事実だもん……いいよじゃあ今日は泊ってあげる」

「お、お」

やった初のお泊りじゃね

この際楓が男であっても欲情しちゃうかも

こんなかわいい子にちんこがついてるとか逆に興奮するだろ

あつという間のデートも終わり今日は彼女が

夕食を振舞ってくれるそうだ

正直あまり食べたことがないから楽しみだ

「ちょっとゆづクン料理で来たからこっちに来なよ」

「うんわかった今行く」

ちなみに俺の家は一人暮らしのくせに少しデカイ

リビングダイニングのほかに部屋が二つあるのだ

まあ俺の親が少しお金持なのも理由ではあるかな

なんで俺はリビングではなく自分の部屋にいるかというと数時間前に

「何作るかはお楽しみだからゆうくんは部屋で待ってて

出来たら呼ぶから」

なんて言われたんで部屋にこもっているが匂いではねてるぞ（笑）

この匂いはハンバーグかな

めっちゃいい匂いがする

「やっぱりハンバーグだ？」

「なにもしかしてのぞいてたの？」

部屋に行って見ちゃダメって言ったじゃん」

「違うよ違う……だって部屋にいてもメツチャいい匂いがするんだも」

「そのおいでハンバーグだなんてわかつちやっただもんしょうがないじゃん」

「そっかドアの隙間とかから匂いが漏れるか

せっかく驚かしてやるつもりだったのに」

「そんなことより冷めちゃって……はやく寝ようよ」

「それもそうねそれじゃあ食べましょ・・・いただきます」

「おう・・・いただきます」パクッ

「ふっ……ふっ……」

「せんじょうしゅうせん……せんじょうしゅうせん……」

「よかった……本当に？」

「こんなはずじゃないって言うほうがおかしいよ」

少なくとも俺の口にはよく出てくるね」

「ほんとによかった・・・あまり人には作らないから心配してたんだよ
まずかったらごーしよつとかね」

いやほんとに楓の料理はおいしかった

店が出せるくらいおいしかった

「うんうん、いいね」

「じちそうさま・・・ねえ先にお風呂貸してもらっていい？」

もし私の体見るならお風呂できれいに洗ったあとじゃないと恥ずかしいから

「うんいいよ・・・その廊下にある2番目の扉が

トイレとお風呂だからよろしく

「うんりよ かい・・・じゃあ先に借りるね」

はあ〜昼間は勢いであんなこと言っちゃったけど

いざとなると緊張するな

気にしないようにしよう楓のほづがもっと緊張しているはずだから

俺がリードしてあげないと

「うんそーすなは」

「でたよ・・・ゆうタンも先にお風呂はいちゃったら」

40分後

やばい心臓のバクバクがとまんねえ

俺今最高潮に緊張してるじゃん

ここは深呼吸深呼吸

それでだめなら水をかぶる

「ふう〜気持ちよかった」

ガチャ

「あ、ゆうくん待ってたよ」

そこには彼女がいた・・・そうだ俺は今から彼女の裸を見るんだ

「おっじゃあさっそくで悪いんだけど見せてもらってもいいかな」

「ハッおっのんおっのん」

「おっ」

「うん
「ファ
サッ

「いや……綺麗だなんて思って……」

そう彼女は男でタマは手術でとってあるらしい

だがちんこは残っている

彼女がこんなにも女らしい体つきであるのは理由があるそうだ

それは彼女が性同一性障害だとわかった小学校の高学年の時に親がそれを理解し

女性ホルモンの量を増やす注射などを打たせたそうだ

もちろん学校は転校し、学校にも事情を話し女の子として通った

それに女性ホルモンの摂取が速かったから声もソプラノ調だし

他の女の子みたいに大きめの胸も手に入ったそうだ

「どうかな・・・気持ち悪くないよね」

「さっきも言った通り綺麗だ？」

「そのあまり近寄らないでくれるかな」

「えっなんで・・・やっぱり男だから」

「ちがうって・・・ああもう」ガバッ

「きゅっ」「ギンギン

「俺の理性が持たないんだ・・・こうなったら最後目でもしちゃおうぞ」

「・・・いいよ・・・」

「えっ・・・今何て言った」

「だ、だから・・・いいて言ったの」カー

その後僕らはことに及んでしまった

もちろん僕も彼女も初体験だが彼女は一人でお尻をいじってたそうだ

だがやっぱり男だったんだな

俺は楓がかわいそうで仕方ない

心が完全な女の子な楓は、普通の女の子にしかみえない

だけど体が男・・・こう言った性行為はできるが子供は作れない

いまもまだ偏見があるやつもいる

だけど俺には構わないのさ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8757x/>

僕の彼女は男の娘！？

2011年12月28日03時49分発行